2021 年度　第 7 回　現代文化人類学会（旧早稲田文化人類学会）　定例研究会

発表者：寺内大左（筑波大学人文社会系准教授）

日時：2022 年 2 月 7 日（月）18 時 15 分～
場所：Zoom によるオンライン開催

＊どなたでもご参加いただけます。ただし、オンライン開催のため、事前申込が必要です。
2 月 4 日（金）までに下記の Google フォームを通じて申し込みください。2 月 5 日（土）以降、参加申込をされた方のみに、Zoom の URL をお送りします。
https://forms.gle/i45id3MgRgQhARiRA

タイトル：開発の森を生きる――インドネシア・カリマンタン焼畑民の民族誌

要旨：

本報告では、企業のアブラヤシ農園開発と石炭開発に直面するカリマンタン（ボルネオ島インドネシア領）の焼畑先住民が、生活の柔軟性（flexibility）を重視しながら暮らしを再編している実態を報告する。そして、柔軟性という焼畑民の生計論理から開発の問題をめぐる議論を再定位することを試みる。

2000 年以降、カリマンタンの焼畑社会は 3 つの大きな変化を経験している。1 つ目は企業のアブラヤシ農園開発と石炭開発である。熱帯林は消失し、焼畑民の生活は根幹から改変されようとしている。2 つ目は民主化・地方分権化である。この政変によって焼畑民の政治力は向上し、森林・土地をめぐるアクター間の政治的なパワー・バランスが変化した。3 つ目は焼畑社会の貨幣経済化である。企業の開発に伴って道路整備が進み、焼畑社会に貨幣経済が浸透することで、諸々の社会制度が変化し始めた。

本報告では企業の土地開発、民主化・地方分権化、貨幣経済化という社会経済変化の中で、焼畑民が 1）資源利用（土地開発への対応を含む）、2）資源利用に関する社会的ルール、3）相互扶助（労働形態、贈与・交換慣行）を再編している様相を明らかにする。

そして、その再編の背後には「生活の柔軟性」を重視する生計論理が存在することを指摘し、一見、非合理的に見える焼畑民の土地開発への対応の仕方の中に、彼らなりの合理性が存在することを指摘する。最後に、焼畑民の生計論理と開発の論理の齟齬に注目して、アブラヤシ農園開発の問題をめぐる議論を再定位する。

お問い合わせ：

現代文化人類学会定例研究会ワーキンググループ　箕曲在弘
minoo [a] waseda.jp
＊[a]を@に変えて送信してください。